異国の地で

遠い昔、異国の地に住んでいたころのことである。

その国で、私はあまり肉を食べなかった。その理由は注文の仕方がわからなかったからである。日本で肉を買いたいときは、普通にスーパーマーケットや肉屋に行けばいい。そこには、牛、豚、鶏の肉が、すぐに料理できる形で、部位ごとにパックされて売られている。だから、言葉を話さなくても、買うことが可能だ。

しかし、その国では、人々が肉を買いたいとき、普通、肉屋に行って、どの肉がどのくらい欲しいのかを直接説明して注文をするという方式だった。それは、その国の言葉を話さない私にとって、かなり難しいことだった。

結局、肉を食べたいときには近くのレストランに行って、英語のメニューを指差しながら注文した。自宅で料理をするときには肉を使わないメニューになった。

その国で一緒に働いていた現地人の同僚は、パソコンの操作が苦手だった。現代社会の中で、パソコンが使えるという能力は、仕事をする上で欠かせないものの一つだ。それは日本でもその国でも普通に共通していた。仕事の合間に、私はその同僚に基本的な操作を一つずつ教えた。私よりかなり年上だったその同僚は、画面を覗き込むようにしながら、懸命にその操作を覚えようとしていた。

　ある日、その同僚の自宅に招待された。同僚の自宅は職場からバスに乗って、40 分ぐらいのところだった。その日、仕事を早目に切り上げて、私達はバスに乗った。バスは街の中心から郊外へと走っていった。バスを降りると、そこには街の中心では見られない、のどかな風景が広がっていた。同僚が近所の雑貨屋で何かを買っている間、私はその隣の肉屋を見ていた。肉屋の粗末な建物の中には、大きな肉のかたまりが天井からぶらさがっていた。その隣にはまだ生きている牛が一頭、ひもでつながれていた。ああ、この牛がいつかこの肉のかたまりになるのだなと思った。ここでは、生きているものが、こうして加工されて、私達の食べるものになるという一連の流れを見ることが普通なのだと思った。

　肉屋の中を見つめている私に気がついて、同僚が話しかけてきた。
「M さん、日本人には珍しい景色でしょうね」
　私は「ええ」と答えた。
「M さんは、羊の肉をさばけますか」
　私は「いや、やり方もわからないです」と答えた。
「私は子どものころから見ていますから、できますよ」
　同僚はにこっと笑った。

　肉を食べるなら、動物を殺して、皮をはぎ、切り分けて、料理できるような形

にしておく。考えてみれば普通で当たり前のことだ。その当たり前のことを、今までまあまり考えたことのない自分に気がついた。

同僚の家で伝統的な肉の料理を食べながら、同僚の家族はにぎやかに笑っていた。やわらかい電球の光を浴びながら、繰り広げられる家族の団らんは、私にとっても見覚えのあるものだった。

そして、それは私の普通と同僚の普通が重なった瞬間でもあった。

（1181 字）

（2022.10 Written by Yuki MORI）

この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例）出典：「たどくのひろば」（https://tadoku.info）

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.